# 闇汁圖解

子規

青空文庫

一、時は明治卅二年十月二十一日午後四時過、處は保等登藝須發行所、人は初め七人、後十人半、半はマー坊なり。

一、闇汁の催しに群議一決して、客も主も各物買ひに出づ。取り殘されたる我ひとり横に長くなりて淋しげに人々の歸を待つ。

一、おくればせに來られし鳴雪翁、持寄りと聞いて、　々に出で行きたまふ。出がけに「下駄の齒が出て來ても善いのですか」と諧謔一番。

一、一人歸り二人歸り、直に臺所に入りて、自ら洗ひ自ら切る。時にクス〳〵と忍び笑ふ聲、忽ちハヽヽヽとどよみ笑ふ聲。

一、準備出來る迄に一會催すべしとの議出づ。座上柿あり、柿を以て題とす。鳴雪翁曰く十句の時は屹度句が失せますと。果して然り。

一、飄亭、青々後れて到る。物無く句無し。

一、一個の大鍋は座敷の中央に据ゑられ、鍋を圍んで坐する人九人、伏す人一人、いづれも眼を圓くし、鼻息を荒くして鍋の中を睥睨す。鍋の中から仁木彈正でもせり上りさうな見えなり。ぬば玉の闇汁會はいよ〳〵幕あきとなりぬ。

一、鳴雪翁曰く、飯を喰ふて來て殘念しましたと。先づ椀を取つてなみ〳〵と盛る。それより

右　りに順を追ふて各盛る、廻つて未だ半に至らず鳴雪翁既に二杯目を盛る。「實にうまいです」。

一、盛るに從つて杓子にかゝる者、青物類はいふに及ばず、豚あり、魚あり、餅あり、竹輪あり、海の物、山の物、何が何といふ事を知らず。只かゝらぬは一寸八分の觀音樣あるのみ。

一、鍋の中を杓子にてかきまぜながら「ヤー〳〵餡餅がかゝつたぞ、誰だ〳〵、大福を入れたのは」と碧梧桐※ぶ。皆々笑ふ。固より入れた者の外に入れた者を知らず。

一、鳴雪翁曰く、うまい。碧梧桐曰く、うまい。四方太曰く、うまい。繞石曰く、うまい。我曰く、うまい。虛子曰く、うまい。露月獨り言はず、立どころに三椀を盡す。

一、マー坊出沒常無し、こゝに隱れ彼處に現る。或は飯櫃の邊に彷徨し、或は碧梧桐の膝に上る。やがて向ひ側にある父の顏を見るや其側こひしく、碧梧桐の背を通り拔け牛伴のうしろより進まんとし、忽ち鳴雪翁の髯に逢著して泣き〳〵走り返る。鳴雪翁直ちに髯を掩ふて曰く、わるかつた〳〵。

一、下戸も喰ひ、上戸も喰ひ、すこやかなる者も喰ひ、病める者も喰ひ、飯喰ふた者も喰ひ、飯喰はぬ者も喰ふ。喰ひ〳〵て鍋の底現るゝ時、第二の鍋は來りぬ。衆皆腹を撫でゝ未だ手を出さゞるに、露月默々として既に四椀目を盛りつゝあり。

一、初は牛飮馬食の勢あり。中頃は牛を飮み馬を食ふの慨あり。第二の鍋未だ半を盡さゞるに、胃滿ち神疲れ、漸く牛に飮まれ馬に食はれんずるの有樣を示しぬ。我は柿腹を抱えて衆に先だ

つて歸る。

一、圖中の名は各人の位置を示し、名の下には各の持寄り品を示す。但し後日調べたる者と知るべし。

一、名の上に記したる句は各人の作なり。

一、鳴雪翁は別に蛤一箇宛を椀に入れて各に配る。之に湯を注げば蛤自ら開きて昆布、辻占、麩、鰕など躍り出る仕掛なり。

一、四方太闇汁十句の作あり。其内

芋買うて歸れば露月既に在り　四方太

闇汁の南瓜におくれ里の芋　同

芋五合大汁鍋の底に在り　同

里芋を二つの鍋に分ちけり　同

芋入れて汁が煮えくりかへるかな　同

芋買うて臺所から上りけり　同

# 青空文庫情報

底本：「ほとゝきす　第三巻第二號」ほとゝきす發行所
　　1899（明治32）年11月10日発行
※底本では、「廻」と「※［#「辶＋回」、第4水準2-12-11］」が混在していますが、そのままにしました。
入力：京都大学電子テクスト研究会入力班（大石尺）
校正：京都大学電子テクスト研究会校正班（大久保ゆう）
2004年11月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 闇汁圖解

子規

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/